

News Letter

2024

9月30日
発行
Vol.01

Introduction

本年4月より、新たな国分寺市史の編さんがスタートしました。

本市では、昭和61年(1986)から平成3年(1991)にかけ、『国分寺市史』上・中・下巻を刊行しました。この市史にはたくさんの研究成果が盛り込まれ、読みごたえのあるものになっています。

では、なぜ今、新しい市史を作るのでしょうか。その疑問にお答えするために、『国分寺市史』下巻刊行から現在までの約30年間に市内で起こった出来事の一部をご紹介します。

遺跡の多くは開発等の工事によって消滅することがあり、各所で事前の発掘調査を行っています。平成7年(1995)に泉町で行った発掘調査では、幅12m・長さ340mの古代の道路跡が発見されました。これは東山道武蔵路という都と地方を結ぶ官道で、古代国家の地方支配を考えるうえでとても貴重な遺跡です。

遺跡の発見が新聞等で報じられると、市民を中心に開発計画を見直すよう運動が起こり、遺跡は現地に保存されることになりました。令和7年1月に供用を開始する国分寺市新庁舎前では、保存された東山道武蔵路が見学できます。

地域の原始・古代・中世史にかかる新たな資料が発掘調査により発見され、積み重ねられています。また、遺跡や資料を保存しようとする人々の声が、地域の歴史を後世に伝える原動力となるのです。



泉町で発見された東山道武蔵路(南から)

以前の国分寺駅北口周辺は商店街の人々で賑わう一方で、建物は密集し、道路幅も狭く、駅前広場の整備が課題となっていました。そこで、市制施行の翌年4月に「国分寺駅北口交通広場」が都市計画決定されます。しかし、道路・駅前広場の整備は遅れ、平成2年(1990)3月に周辺宅地を含む一体的な整備を目指す「国分寺駅北口地区第一種市街地再開発事業」を新たに都市計画決定しました。この計画は、バブル崩壊による市況の悪化や社会状況の変化により度々変更され、令和3年(2021)に完成をみました。

こうした街の変化も大切な地域の歴史のひとつです。新たな国分寺市史では、市制施行以後の歴史も記録として残り、後世に受け継いでいきます。



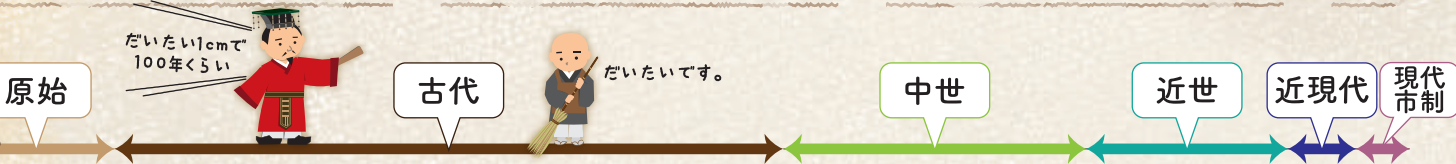
再開発後の国分寺駅北口広場

30年という時間の流れの中で、新たな資料が発見され、人々の暮らしや市の様子が大きく変化しました。新しい国分寺市史は、こうした変化を踏まえ、新たな成果を盛り込み、市民の皆さまに親しんでもらえるものを目指します。

memo

中面の年表は国分寺市の歴史を分かりやすく表記したため、各年代の長さは考慮せずに作成しています。これを各時代のおおよその長さを参考にすると、以下のようになります。

なお、原始時代は考古学上「旧石器時代→縄文時代→弥生時代」という時代区分があります。人類が日本列島へ初めて流入した時期(日本における旧石器時代の始まり)については多くの議論がなされていますが、研究者の多くは少なくとも4万年前頃には日本列島で人類が暮らしていたと考えています。仮に「4万年前頃から」として下の表に当てはめると、原始時代だけで3m以上になるほどの長さになります。



～市史編さん室から～

市史編さんは、原始・古代・中世部会、近世・近現代部会、現代市制部会という3つのグループで活動しています。6月に各部会の出発式を行い、部会の活動がスタートしました。

市史編さんは、専門家や研究者だけでなく、市民の方も協力員として参加しています。より多くの皆さまに手に取っていただける市史になるよう取り組んでいきます。今後の活動にご期待ください。



市史編さん事業着手記念 トークセッション
(令和6年4月12日開催)

～市に関する歴史資料や情報を探しています～

充実した市史を作るために、国分寺に関係のある資料や記憶・情報などを探しています。資料の閲覧・撮影・調査などにご協力いただける方、昔のお話を聞かせていただける方は、市史編さん室までご連絡ください。また、これは資料かな?と思った時もお連絡ください。

お問い合わせは市史編さん室[☎042-571-7815]まで。

○古文書・絵図・地図など

○市に勤務(在学)されていた時の資料

○市ゆかりの人物の資料や情報

○市内で撮影された写真・映像、音声記録

○市が登場する文学・芸術作品などの資料や情報

○自治会町内会・青年団・消防団などの記録や書類

○古いチラシ・パンフレット

○日記・手記、戦時中の体験記録など

○昔から地域で行っている行事などに関する記録



市内旧家に残る古文書

国分寺市史編さん News Letter 第1号 令和6年(2024)9月30日発行

編集・発行: 国分寺市教育委員会市史編さん室

〒185-0034 東京都国分寺市光町1-46-8 ひかりプラザ5階 電話: 042-571-7815

●およそ3万5千年前

●およそ5千年前

●7世紀後半

●天平13年(741)3月24日

●天平宝字元年(757)

●鎌倉時代

●建武2年(1335)

●天正18年(1590)7月

●承応2年(1653)

●延宝6年(1678)

●享保7年(1722)7月～

●寛延元年(1748)8月～

●文政10年(1827)

●天保末～明治(1840～1910年頃)

●明治4年(1871)12月20日・同5年1月29日

●明治22年(1889)4月1日

●明治22年(1889)4月11日

●明治26年(1893)4月1日

●大正11年(1922)10月12日

●昭和15年(1940)2月11日

●昭和20年(1945)

●昭和30年(1955)4月12日

●昭和39年(1964)10月1日

●昭和39年(1964)11月3日

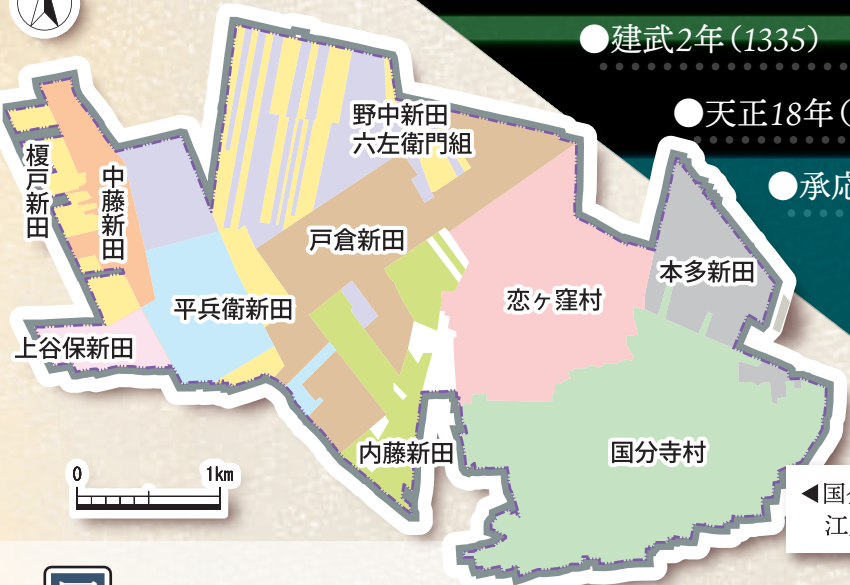
●昭和54年(1979)

●昭和59年(1984)11月3～4日

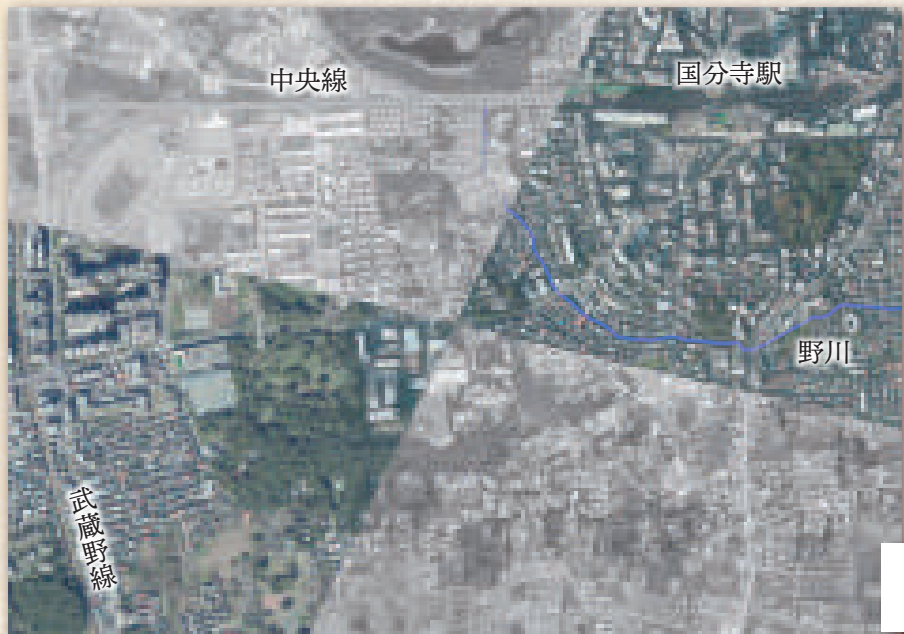
●平成14年(2002)4月1日

●令和3年(2021)2月

●令和7年(2025)1月



国分寺市域では、明治17年(1884)に江戸時代以来の10ヶ村を寄せ集め、「戸倉新田外九ヶ村」がつけられます。これは村の規模(人口や戸数)を基準につくられた村々の連合で、旧来の村の結びつきを無視した改変でした。反対の声もありましたが、明治22年(1889)にはこの村々が合併して一村となり、現在の国分寺市域の前身となる「国分寺村」が誕生しました。



国分寺市 これまでのあゆみ

はじめて市域に人が住む

市域内に大きな集落がつくられる

武蔵国の成立

国分寺建立の詔

▲作画：大塚 敦子

武蔵国分寺の主要な建物が完成

鎌倉街道上道が開かれる

国分寺の再興(医王山縁起)

関東が徳川氏の領国となる

玉川上水の開通
(4年後の明暦3年に国分寺市域に分水が引かれる)

国分寺村・恋ヶ窪村で検地が行われる
(市域に残る最古の検地の記録)

武蔵野新田開発

尾張藩鷹場の設定

寄場組合の設置
(国分寺市域は拝島・田無・府中の3つの寄場組合に属す)

宝雪庵可尊・本多雖軒(在村文化人)の活動



▲天平13年(741)国分寺建立の詔(『続日本紀』) 画像提供：府中市郷土の森博物館



▲国分寺村古絵図(国分寺所蔵)

▲南北武蔵野新田養料金始末書(個人蔵)
※養料金制度は幕府による新田保護政策

天正18年(1590)、徳川氏が関東を治めはじめ世の中が安定すると、村に住む人々は開拓を行い、耕地を増やしていきました。
江戸時代以前、現在の国分寺市域には野川流域にある国分寺と恋ヶ窪の2つの村が営まれていましたが、承応2年(1653)に玉川上水が敷かれると武蔵野の新田開発が進み、市域の西部や北部にかけて8つの新しい村が次々と生まれました。

日本多家住宅長屋門
(昭和40年頃撮影)

国分寺市が誕生し令和6年(2024)で60年、還暦を迎えました。
町時代の昭和37年(1962)には人口が4万人を、市となる39年(1964)には5万人を超え、短期間で大きく増加しました。
また、上水道の供給が始まり、住居表示の整備も進められるなど、町から市へと変わるなかで、人々の暮らしや風景が大きく変化していきました。

▲南町・泉町・東元町・西元町周辺の空中写真(左上/右下：昭和39年(1964)・右上/左下：令和元年(2019)撮影、出典：国土地理院)

武蔵国分寺跡が国指定史跡となる

町制施行により国分寺町となる

国分寺町が空襲を受ける(太平洋戦争)

国産小型ロケットの水平発射実験

東海道新幹線の開業
(光町の鉄道技術総合研究所で研究・開発)

市制施行により国分寺市となる

殿ヶ谷戸庭園の開園

市制施行20周年第1回国分寺まつり

都立武蔵国分寺公園の開園

国分寺駅北口地区の再開発が完了

市役所庁舎が泉町二丁目に移転